哲學研究　第三百三十一號

本佛の哲學（完）

——特に天台に就て——

河合陟明

ii　觀心哲學の宗教的完成

今や漸く天台教學に墓標を立つべき時であり、而も同時にそこに新たなる搖籃の子守歌を聞くべき時でなければならぬ。智者大師の千古に卓越せし教觀二門の、その歿後における命運果して如何。彼は一往、久遠の事佛を立て、否天台こそ佛教史上始めて大いに發迹顯本の三如來を論じ、以て悠久無限なる時間上に、卽ち事なる概念の上に、本迹を論じて、茲に卽ち久本近迹となしたのであるが、而もその本なるものがその眞意味を充足せず、彼れの所謂久遠以來の本も中間も今日も總て畢竟するに中間性を脫せず、有限的時間性を脫せず、此に於ては到底無作の超時間的なる——從つて無始無終の時間を制する——眞如に及ばず。予の所謂「事分」個佛は「理全」眞如に及ばず。かくて佛陀論上における事の本迹の勝劣は、更に實相論上の理本事迹に奪はれて法勝人劣となり、卽ち非人格的超時間性の理に對し人格的或は人格化的時間性ないし人格完成の高次なる叡智的超時間性すら遂に第二義に墮し、かくて理本に對しては事迹なる迹の中に於て且く本佛なるものを立つるものであるが故に、その本は究極的本に非ず。かるが故に又、本門十妙の一々の歸結をも、本迹雖レ殊、不思議一也といふ法性の一理に置き、以て本迹を融通することを主とし、而して方しくその理絶二本迹・古今・自他・權實一といふ所謂非本非迹・非古非今・非自非他・非權非實なる双非の理極たる無相無形の不可思議なる超絶性に於て、最後の安住地を求めんとするに至つた。75)

75　玄義七下21

且又彼れは啻に理圓のみならず夙に事圓といひ又圓圓

ともいふ概念と用語をも用ゐながら、その事圓は遂に圓融に非ず圓滿に非ず、不融・未融・隔歴・分裂にして、眞の事圓の佛身觀を全うせず、又眞の事圓の法界觀・實相觀を全うせず、まさに因果論上よりも認識論上よりも實在論上よりも將又價値論・救濟論上よりも、遂に去暦昨食の斷案を免れざる本無今有といふ致命傷に倒れ、以後の佛教史をしてうたた茫漠たる暗中に模索彷徨せしむるに至つたのである。76)

76 同九下18

かくて長夜の迷夢は遂に日蓮大士に至つて始めて、豁然として一擧に覺まされ、即ち茲に始めて眞正なる無始の事圓の本佛に達して、古今を通ずる佛教史の懸案を解決し、更に最後の一歩を進めて、この大いなる超絶的尊嚴の本佛をも遂に我が己心の一念に攝し、かくて茲に一念三千を眞の法界本有の實相として客觀的に完結するのみならず、凡て苟くも實在なるものの歸結と出發點とを、從つて又その始中終を一貫する永遠の安住地を、實に我れそのものの自己そのものの神祕なる內面の世界に發見するに至つたのである。法界の本尊を拉し來つて我れに述語し、實在の本佛を取り來つて直ちに自己そのものの Prädikat とする。遍在にしてかつ全智にして全能なる絶對者は、眞に己心に本有はたまた己心の本有なることを、健實にして嚴密なる眞理の基礎に立つて、認識し體驗し直觀するに至つたのである。之を實に『觀心本尊』と稱するのである。果然、觀心本尊とは是れ即ち本因本果の別名に外ならず。故にこの同一眞理にして而も二大教義たる所のものを堂々光顯したる開目鈔と觀心本尊鈔とは、實に日蓮教學然り佛教哲學の最高指針たり。77)

77 日蓮、765開目鈔、939觀心本尊鈔、

かくて天台止觀の十乘觀法も、今や單に法性々具の十乘觀法にとどまらずして、全く無始法界の源頭より本佛實在の靈光を仰ぎ、而も其を己心の深き內奥に仰ぎ、一念の信仰を以て是と直接し是と合體し是と感應道交して、佛道實踐の第一歩とする。從つて天台に於ても、一面には止觀佛師といふ如き法性至上主義なると同時に、寧ろ一層深い宗教的意識と實踐修道の內奥に於ては、但是感應道交、而論二發心一耳といふ、馥郁たる信仰の香氣高きものある　その止觀本來の Postulat たり否一般に宗教本來の要請たる所のものを、茲に全く滿たし得て、據つて以て眞の宗教實踐は、常に每に「觀心本尊の十乘觀法」

なる所に存するものなることを確立するに至つたのである。實踐否更に純粹理性の Kanon 正に茲に燦然たり。

かの危機神學・否、基督教、否、宗教一般、否、哲學一般の、常に問題とし對象とする所の Geschichte und Endgeschichte 又 Zeit und Ewigkeit 或は Diesseits und Jenseits 等は、悉くわが一念の己心の神祕なる內奥に外ならないことを茲に立證したのである。わが己心一念の信仰の終極に於てこそ、方しくこの己心其物の中に於て、ブルンナーの所謂——されど彼等が思ひも及ばざる、わが大己心界の神祕なる法廷に——Geltendmachen der Gewissheit der Vollendung 然り偉大なる信仰の眞理・救ひの確かさの眞理が、卽ち大覺成道の眞理が、いはゆる信念成佛の眞理が、而も成佛卽成本佛なる大眞理が、妥當し實現するに至るのである。[78] 是こそニイチエの所謂 fröhliche Wissenschaft であり、フィヒテの所謂 Anweisung zum seligen Leben であるべきものであり、カントの願ひし最高善・至上善 bonum consummatum の實現の道なのであり、然り正に本有概念の奧義たるものでなければならぬ。かくの如き意味にまで發展する本有思想の脈絡一貫の論理を求めて、予は本有哲學を樹立するのであつて、始め「無作本有の眞如法性」より終は「無始本有の本佛實在」に達し、更に最後の一歩を進めて遂に「己心本有の觀心本尊」に至る。日蓮聖人觀心本尊鈔に云く、釋迦多寶十方諸佛、我佛界也、紹繼其跡、受二得其功德一……我等己心釋尊、五百塵點、乃至所顯三身、無始古佛也。

78 E. Brunner: Erlebnis, Erkenntnis und Glaube. 132.

由來佛教は唯心論であつて、而て佛教に於て唯心といふ形而上學が總てを包含することはかくして明かとなつたが、これを同じく佛教實在論の根本原理たる本有といふ概念に隨つて、純論理的に先驗的演繹をなし、又先驗より經驗への推移發展を論じ、そこにカントの物自體の問題やボルツアーノの眞理自體といふ如き思惟方法を、或は解決し或は開顯しつつ、眞如といふ quid juris より本佛といふ quid facti に至る實在發展の全行程を論じ、以て哲學的諸領域の考察より宗教の王國へ思惟必然性を以て進み入り、かくて徹底的合理の基礎に立ちつつ無限なる神祕の世界に突入しゆき、遂にその步武の極まる所、わが己心の內奥の最後の神殿に偉大尊嚴なる超越の全能者「本佛」を拜して、その still and small voice

否又霹靂 thunderbolt の如き Anspruch, Zuspruch, Tatwort を聞き、[79] いはゆる生佛の感應道交を體驗し實證して、據つて以て歴史の意味・生の祕義を、我が人格的自由の深き內面の世界における靈性の確信に求むるといふ所のものこそ、卽ち日蓮聖人の「觀心本尊」の宗教哲學であり、予の本有體系の哲學であるのである。觀心といふことの眞の意味、然り觀心といふ實在認識の實踐哲學の最後の意味は、實に觀心本尊に極まらねばならぬ、觀心、而してプラス觀本尊に極まらねばならぬ そのとき觀は既に信であり、信は既に行であり、行は既に證の一分であるものとなる。觀心本尊！そこにこそ「己心の本有」なるものの最後の意味があり、いはゆる本有體系の第一寶が存する。叡智の至極に立てる神祕の信仰、それは哲學的信仰ともいふべく、否、哲學的信仰の極致に立てる宗教的信仰であらねばならぬ。一念三千といふことが此に於て始めて全きを得るに至る、云く觀心とは一念なり、否、觀とは一念なり、本尊とは、否、心本尊とは三千なり、否、三千中の佛界なり、卽ち十界中の佛界なり、その佛界の無始にしてかつ統一的なるもの、無始以來一大根本的統一を保てるもの、それが本佛であり本尊である、而もその本佛卽ち無始以來の統一的佛界によつて、十法界の全體卽ち全宇宙は圓慈化せられ功德化せられ佛乘化せられてゐる。[80] その「圓慈的宇宙」を拉し來つてわが己心の一念に包攝し、わが一念の己心の述語とする、屬性とする、內在とする、本有とする。無始の法界、その中心の無始の本佛、無始、ゆゑに久遠であり、ゆゑに常恒であり、ゆゑに現在であり、ゆゑに現實であり、ゆゑにこの客體に對して Antwort し verantworten すべき、然り汝に對する我れにとつては、實踐であり、實證であり、感應であり、體驗であり得るし、又あらねばならぬ。そこに實在も認識も實踐も、境妙も智妙も行妙も、在るものも見るものも働くものも、有も知も用も、ロゴスもパトスもプラクシスも、一切ビオスの全內容が灼熱する。己心の內容は常に性善性惡であり、十界互具であり、civitas diaboli と civitas Dei 惡魔の國と神の國は每に吾々の背面に開いてゐるが、然し實在の圓融論理と圓融實踐は、魔界卽佛界、行二於非道一、通二達佛道一である。而して觀心本尊はその極致を示す。然り其が實在本有の根本構造であり且つ根本要求である。ただ天台は未だ此處に達したかつたが、その根柢深き甚

礎を開拓した人であつた。

79 E. Brunner: Die Mystik und das Wort, 79 ff.

80 法華經講義卷一107—112　卷六245　卷七12—14

先に本因本果の概念に關して天台を開顯し、以てその言葉を保存したるまゝその論理を旋回し意味を充實して、實在と因果といふ問題を解決し、今は觀心法門に就て同じく天台を開顯して觀心本尊に來たらしめ、以て實踐と認識の問題に燦爛たる光を投ずるに至つた。前者は純粹理性の問題といふべく後者は實踐理性のそれといふべき如くであるが、然し因果といふは既に實踐概念であり、又認識といふは純理の領域に屬する。純理も實踐も、實在も因果も認識も救濟も、總てが全く一に圓融圓滿して一大完結體系をなし、同時に無限なる一大現實的開展としての當爲的課題をなす所に、佛教哲學の極致が存し、其は卽ち日蓮教學に於て之を發見することができるのである。宜なる哉、妙とは具足なり、妙とは圓滿なり、妙とは開くなり、妙とは蘇生なり、具足とは生命の統一であり蘇生とは價値の創造である。かくして本論の最初より相比較し來つた天台とカントに於て、天台既に日蓮聖人の所謂本化別頭の教觀に開顯せられ了つた。カント哲學また同樣の運命を辿らねばならぬ。特に神の問題に於て然りであるのである。然し日蓮教學及び本有哲學の體系的展開は後篇に讓り、再び佛教史の批判的論述に移らう。

今や天台學に最後の斷を下さねばならぬ。まづ彼れの教學の特質を綱要的に語るならば、一は宇宙觀的眞理としての實相論と、二は絶對者たる神の問題いはゆる人格實在としての佛陀論と、三は人生哲學的なる實踐としての觀心論との、三者を學ぐべきである。一は空間的なる理圓論であり、二は時間的なる本迹論であり、三は超時空的なる止觀法門である。一は quid juris の問題であり、二は quid facti の問題であり(勿論、價値的なる、或は價値完成的なる quid facti であり)、三はこの一と二を結合して而も之を自己自身に、否、自己自心に、然り實在の根本原理たる唯心卽己心の根柢に、己心の內面に、發見し否體驗せんとするものであるのである。然し嚴密にいはゞ、實相の空間性と觀心の超時間性といふは同一のものであつて、たゞ前者は客觀的に色心等分的に或は色心双具的に、所謂一色一香無非中道といひ、乃是一草一木、一磔一塵、各一佛性、各一因果、具足

緣了一等といふ如く、81) Theorie として見るに反し、後者は主觀的に唯心的に Praxis として見るとの相違あるに過ぎない。

81 金剛論、日蓮、930 觀心本尊鈔、

而もこの三面の長所に就て各々根本的なる不備を藏し、かつその源由は唯だ一の佛陀論上に存することを看破せなければならぬ。其は卽ち無始本有の統一的本佛とその綜合統覺といふ眞の實在認識を全うし得ざる顯本論の解釋の不備よりして、佛敎哲學の極致たる一念三千の實相も亦成立せず、更に觀心の實踐も亦單なる法性の止觀にとゞまり、かの偉大にして尊嚴なる客體的超越の絕對者——全能の本佛——を、眞に觀不思議境の第一對象として中心正面として我が主體的己心の內奥に否前面に拉しきたり——從つて所謂十境十乘といふノエマとノエシスロゴスとプラクシスにおけるノエマ的十境にプラス一境卽ち第十一境として、否實に第一境として——之をこそ觀心修行の對象としつゝ、以てその神祕なる感應を體驗するといふ、深遠なる實在の論理と叡智の至極に立てるパトス的信行の妙旨とに達せず。之を寸鐵刺人て去暦昨食と斷じ、匕首一閃、本無今有の戲論といふ。此に於てか彼れの最も得意とする所にして而も又最も深き致命傷たる所のものを唯だ一言に語らば、其は卽ち時間上における本迹觀の不備にあり、換言すれば、佛陀の實在性の問題に存するものなることを知るに至つたのである。

iii 本佛の統一的構造概說

佛敎史上屈指の哲人たる天台まづ破る。余は風を望んで隨ふこと宛も大陣既に破るれば余陣は多く勞せずして次第に破るゝが如き慨がある。然しながら佛敎史上の混亂は勿論單に天台のみによらずして、又多くの諸方面の理由によるものでもあることを知らねばならぬ。而して今茲には其等諸宗諸家の批判に入るに先だち、天台六世の法孫として大いに智者大師の敎觀を、その沒後百年、權實本迹雜亂の時代に憤然蹶起して之を發揚し、以て佛敎正統の法華經思想を傳持して後昆に存續せしめたる、命世の敎傑、妙樂大師湛然の佛身觀に就て一瞥を拂はねばならぬ。

妙樂は種々なる點に於て天台よりも進步せる思想を示してゐるが、然しその歸結に至つては飽くまでも天台に忠實なる學匠として、その敎觀の維持に終始したる人であつた。由來、天台は法華經を釋するに、我今處ゝ中說、

令レ義易ニ明了一として、因緣・約敎・本迹・觀心の四釋を以てし、その本迹の示相の一段に至り、この經が古今を貫いて常に序・正・流通の三段を有することを示すべく、文句の劈頭

次示ニ本迹一者、久遠行ニ菩薩道一時、宣ニ揚先佛法華經一、亦有ニ三分、上中下語、亦有ニ本迹一、但佛佛相望、是則無窮、別取ニ最初成佛時、所說法華、三分上中下語一、專名爲レ上、名レ之爲レ本、中間行化、今日王城、未來永々、所說三分、但名爲レ下、但名爲レ迹、

と論じ、頗る含蓄深き一句を洩らしてゐるのであるが、妙樂は更に之を敷演して、

自從ニ本因所レ稟、莫レ非眞實三段一、雖ニ俱眞實一、本不レ可レ多、故下三文、咸同一本因果、眞實三段敎相、此中正簡ニ、久本眞實一、是故云也、然以ニ本因所レ稟、亦是彼佛迹說一、恐ニ無窮一故、但在ニ今佛因果一爲レ本、據レ理非レ不レ稟ニ余佛化一、因緣約敎、既指ニ今佛一、故明ニ本迹一、且廢ニ於他一、故指ニ今經壽量一、爲ニ釋迦本一、不レ得ニ更指一、前佛所說一、前佛復有ニ前佛一、故云無窮一、唯指ニ一佛一、則無ニ斯過一、降ニ茲一本一、余皆是迹、(2)

と說き、更に無窮の極みに於て果してなほ有佛なりや無佛なりや、得道得果の勝緣たる敎法ありや否や、或は內熏自悟なりや或は六塵爲經なりや等と、興味深き問答を列ねてゐる。

元來、佛敎は釋尊一佛より發して三世十方に多佛の存在を說くものであるが、而もそこに條然たる一貫の中心あつて存し、まづ小乘阿含の經典に於ては、過去に七佛・未來に彌勒あるも、現在は釋迦牟尼によつて敎化せらるべきを斷じ、茲に時間上における有限的中心を示し、次で方等・般若・華嚴・大日・阿彌陀等の諸權大乘經に於ては、十方世界に亙つて幾多の淨土の存在とその化主の佛陀とを說くのであるが、此處娑婆世界は釋尊の化境にして、この師主によつて我等一切は救濟せらるゝを斷じ、茲に空間上における有限的中心を示し、更に實大乘たる法華經に來つては、まづ迹門方便品に於て、總諸佛・過去佛・未來佛・現在佛・釋迦佛といふ五方面より、その佛果の人格的內容たり又衆生救濟の方法たるものとしての權實二智・慈悲誓願・功德神通・敎行の因緣等が、三世十方に亙つて一佛乘たることを說き、茲にまづ佛界統一の序論を示して之を「五佛同道」と稱し、進んで竟に

82　文句一35 36

本門壽量品に至つてこの佛體の最高統一を示し、以て眞正なる本佛常住を顯說するに至つた。此に於て先に小乘と權大乘とを通じ時間空間上よりの有限的中心といふ、化緣に約しての準備的敎義は、全く本質論上より解決せられて無限の時空を貫く絕對的中心を確立し、卽ち此土人界における歷史的現實の如來釋尊を以て一躍直ちにこの無始無終・本有常住の統一的實在者・本佛なることを斷定するに至つたのである。

方便品に云く、

十方佛土中、唯有二一乘法一、但以二假名字一、引二導於衆生一。我本立二誓願一、欲レ令下二一切衆一、如レ我等無二異一、化二一切衆生一、皆令レ入二佛道一。諸佛本誓願、我所行佛道、普欲レ令下二衆生一、亦同得中此道上。諸佛兩足尊、知二法常無性一、佛種從レ緣起一、是故說二一乘一、是法住二法位一、世間相常住。

壽量品に云く、

諸佛如來、法皆如レ是、爲レ度二衆生一、皆實不レ虛

故に佛敎に於ては、一切經に現れたる三世十方無量の諸佛は悉く法華本門の一釋迦牟尼佛に統一せられ、更に進んでこの一切經中最高敎相たる壽量顯本說の奥底には、實に超敎相的無限の多佛が內包せられてゐるのであつて、この純理に根據する所の無限系列として無始本有なる佛界の實在と、その統一の爲の構成原理たる認識論的綜合統覺の論理と、その成立に關する制約原理としての因果論的感應緣起の理法との、三面を全うすることによつて、始めて統一本佛の實在を論證することができるのである。是をこそ眞正の意味に於て日蓮敎學における「壽量文底祕沈」の奥義といふ。

かくして唯一にして而も統一的・統一的にして而も唯一なる一大本佛の構成には、開いてまづ二面を見るべく、一はまづ一切經所說の諸佛を悉皆統一する敎相的統一であり、二は五百塵點を一往有限と見ると共に再往無限と見、卽ち寄レ數說二非數一ものとして、その所謂有限的五百塵點より眞無限の無始に溯源して超敎相的純理に根據する佛界の實在を見、更に一歩を進めてその絕對的完結體系としての嚴密なる構造を見るに至るとき、茲に始めて本佛を發見するに至るのであつて、之を純理的統一といふ。純理的統一なくば敎相的統一も亦完結せない。然し否從つて二種の統一も亦勿論一に統べらるべきものであり而もその絕對的統一中心は再び敎相に遡うて卽ち遡

教相的に、壽量品の釋尊を指すのである。故に釋尊は教相的に――詳しくいへば教相の範圍内における純理的・因果的成立の實在者として――五百塵點久遠實成の個佛であると共に、超教相的純理の成立による無始の因果完了的實在者として、無始本有の超個佛的一大統一本佛であるのである。而して更に人類世界への歴史的出現は卽ちその應現であるのである。故に釋尊の佛陀性に就ては所謂法報應三身の佛格を見ることはいふまでもないが、更にその三身卽一身の保持者として、個佛たると本佛たるとの二面性を見、又その人格的活動性に就ては應現と實成と本有卽ち常住との三面を見るべく、この總てを一括して「壽量顯本」と稱し「久遠實成」と稱し「報應顯本」と稱し「本佛釋尊」と稱し、乃至、我が大主觀界の「觀心本尊」と稱するのである。

更に教相と超教相との二面に亙る所の廣義における純理なるものを展開するとき、卽ち本佛成立の conditio sine qua non としての眞理内容を檢討するとき、そこに先にいつた如き、純理的多元の實在と（狹義における純理）因果的緣起の系列と、統覺的認識の統一との、卽ち純理的可能と實踐的決定と叡智的完結との、三面を見るべきであり、更にその第三の認識論的條件を主として考察するとき、そこに更に別の意味における三面の實在條件が展開するのであつて、一は本佛成立の quid juris として無作の眞如の絶對的理本覺であり、二はその媒介者として有始の個佛の絶對的事始覺であり、三はその方しく quid facti として無始の本佛の絶對的事本覺である。而して此は一大絶對なる本佛といふ統一的實在に向つての自覺的發展體系を示すといふことができる。その體系構成に當つて右の三種の覺の modus は必須不可缺條件として共に絶對的であるのであり、その中に於ても第一は本體的・先驗的絶對であり、第二第三は現象的・經驗的絶對である、經驗的絶對といふは勿論經驗完成的・價値完成的・超驗的絶對を指す。而して第二に對し第三は單に前者の無限累積としての Mongousystom といふのみならず、そこに方しく積分的操作を加へて完結的統一の體系としたるものでなければならぬ。然しその統一作用そのものは又飜つて第二の個佛に求めねばならず、否、一層根本的には第一の眞如に於て之を求めねばならぬ、眞如は一切の quid juris であるのである。從つて又、所謂 Substanzidisnus と Nominalismus といふ點よ

り見、又媒介といふ概念より見ては、第二の個佛が人格としての實體であり、第三の本佛が名目であり、此は共に時間範疇に屬して、有始と無始といふ異りはあるが、齊しく經驗完成の自覺的絶對者であり、之に對し第一の眞如が先驗界における超時間的普遍者として、卽ち理としての實體として、かの人格的卽ち事的なる實體と名目との統一の媒介原理をなす、換言すれば「無作を媒介して有始と無始との統一をなす」、といふこともできる。[83] 予が眞如を名けてカント開顯的なる物自體、否、心自體、といふよりも更に一歩を進めて先驗的なる覺自體といひ、茲に三諦法性としての中道の先驗的統覺力を見、以て古來の所謂理本覺なる概念の意味を正しく明かにすると共に、本佛なるものの論理的構造を佛教史上始めて又正しく明かにすることによつて、眞の本覺概念を完成し、そこに本佛の事本覺といふものの眞意義を樹立して、據つて以て「本覺概念のコペルニクス的轉回」を叫ぶ所以は實に此に存するのである。[84] 且從つて予は、既に他の機會に於て明かにしたる如く、本佛構成の認識論的原理を「統覺」と稱し、そこに個佛としての相互統覺より本佛としての綜合統覺への發展を論じ、また特殊統覺卽ち佛界統覺としての本佛の本覺と、一般統覺卽ち十界統覺としての本佛の本願といふ、智悲・覺願の二面に亙る本果妙的規定を明かにし、乃至、この統覺といふ概念に本佛論上の一切の規定を包容し整束せんとするのであつて、今述べた所はその若干部面であるのであるが、[85] かくして佛教史上予は始めて統覺といふ語を眞如の quid juris より佛陀の quid facti を貫いて一系の論理的脈絡として之を用ゐるのである。其には勿論カントの transcendentale Apperception との相違及び開顯をも明かにせねばならぬが、其は後に讓らう。

右は本佛論的自覺體系として、三種の覺的原理の綜合統一が本佛を構成する所以を論じたのであるが、之を四面よりするときは卽ち予の哲學體系として最も根本的かつ總括的なる、無作・有作・有始・無始といふ、天台發展的、ないし神の存在の問題に關するカント及びヘーゲル開顯的なる、アンチノミイ綜合の辨證法體系として、本有四門のシステムが成立するのである。或は更に五六七八と發展して、後に論ずるが如き五双十門による本佛體系の構成ともなり、乃至、本佛實在の十二緣起ともなつてゆくのである。然しこれらの詳細も亦後を期せねば

ならぬ。

83 拙稿、「本佛の教學」、法華、第三十卷第一號、第二號、

84 拙稿、「本覺概念のコペルニクス的轉回」、22に同じ、

85 拙稿、「本佛の教學」、法華、

今、妙樂の佛身觀より揣くも本佛構造の一端に突入したが、再び翻つてこの立場より台荊兩哲を吟味してみよう。天台は既に法華玄義に於ても、六重本迹を說くとき、

約二教行一爲二本迹一者、最初稟二昔佛之教一、以爲レ本といひ、昔佛方便說レ之といひ、また攝二得本時之師教妙一といひ、兼二得本師十妙一といひ、更に本門十妙の三世料簡に當り、最初妙覺の顯本に就て、若初住被レ加作二妙覺一、亦指二初住一爲レ本と論じて、彼れの所謂最初爲本の佛陀になほ被加の義あり又本師としての先佛あるの義を微說し、轉じて摩訶止觀に於ても、

過去久遠、過去久遠、邈無二萌始一、現在現在、無邊無際、未來未來、展轉不レ窮、若已今當、不レ可二思議一、當レ知止觀、諸佛之師、我樂淨等、亦復如是

といひ、妙樂は、無始皆爲二、過去過去所攝一、故云二無萌一と釋し、更に轉じて法華の本經の最初の如是我聞の如是を釋するに、智者はその四釋中の本迹釋として、

約二本迹一釋二如是一者、三世十方、橫竪皆爾、過去遠々、現在漫々、未來永々、皆悉如是、何處是本、何處是迹、且約三釋尊、最初成道、經初如是一者、是本也、中間作佛說レ經、今日所レ說、經初如是者、皆迹也86)

86 玄義七上32 35、七下14、止觀一ノ二30、文句一49

と示してゐる。彼れが釋尊を以て本佛となすことは、佛教一貫の教理・教綱・教權として、卽ち佛教のあらゆる方面を綜合したる最後の結論としての大義名分として正しいが、然し本が最初有始なる規模は依然として變りなく且つ不完全である。然し如上の說によつて彼も亦、佛界無限の系列を認め、その無始實在を暗示せる如くであるが、なほ未だ顯說せず、況んやその統一の論理的構造に於てをや。爲にその時間上における顯本論も有限にして新成妙覺論に窘窮し、その空間上における分身論も亦有限にして他佛の群雄割據を馴致せしめ、かくて如來の本懷たり法華の經旨たり智者の眞意たりし佛教統一は、依然として成らず、寧ろ茲に根本的なる不備を留めて後の分裂的はたまた雜糅混淆的見解を誘發せしむるに至つた。

然るに妙樂に至つてはこの佛陀の實在性の問題が一層明かに自覺せられ、かくて漸く佛界無窮の說を顯示せん

とするに至つたが、然も彼は進んで茲に一大飛躍を試みて以て其の完結概念としての眞無限にして無始なる實在を、從つて又その統一性と根本性とを、提立するに至らず、忽然として寧ろ無窮を恐れ無始を恐れ、唯指二一佛一則無二斯過一となし、恐レ墮二無窮一、唯論二釋迦一となし、果然退いて有始の一點にとゞまり、卽ち一佛の一とは固より單なる個佛としての一にとゞまつて本佛としての大統一的なる一に達せず。換言すれば壽量顯本の文相たる五百塵點に飽くまでも忠實にして、否忠實に過ぎて却つてそこに潛める所の眞意を發見し又發揮すること能はず、彼れの本佛概念も亦遂に、所謂歷史佛に對しては勿論超歷史佛ではあるが、然し敎相佛にとゞまつて超敎相佛に達せず、故に絕えて超時間的妥當の眞理性と常時間的事實の實在性とを意味すること能はずして終つた。彼等に於てこの理事二面の要求を完全に滿たさしむるものは、單に眞如法性の理的本體のみ、非人格的無形法身のみ、極果人格の如來は遂に與らず。

天台は夙に壽量品を釋するに當り、此品に果して法報應三身といふ佛格內容其物の常住ありや否やを反省して、巍然として苟くも全佛敎の死活に關する顯本の敎詔には此義門も亦燦然として光輝を發し、以て他經に傑出しゐることを斷定して而して云く、

問、義推常可レ然、欲レ文何據、答、明者貫二其理一、暗者守二其文一、但尋レ詮會レ宗、是敎之正意、苟執二糟糠一問レ橋何益、悟則達到已矣、那更盤二桓阡陌一何爲。87)

87 文句廿五48 49

と卓說しながら、而も壽量の心髓・佛敎の魂魄たる本佛實在の一大事に至つては、遂にこの自家高邁の卓論を實行し得ずして終つたのである。彼はかくて人格の佛陀なるものに於て無限・無條件の絕對を發見し得ざりしが故に、退いて眞如法性といふ本體論上の絕對としての無作の根本實在に於てその滿足を求めたのであつた。苟くも哲學や宗敎は絕對の學・實在の敎・眞智への努力・第一義の信仰として何等かの根本的なるものを求め、そこに最後の安住を見出ださねば止まぬものであるが、彼も亦遂に無相の一理・無の立場に還沒するを免れなかつたといひ得るであらう。然り、果然、彼れの致命傷はその無、所謂佛陀論上の本無今有なる無にあり、かるが故に眞如一理の無相なる所謂絕對無的思想に歸し去つたのである。飜つて現代は如何？……古今、思想史の批判、躍然と

して聲あるを知る。

かくの如き天台思想の歸趣は、また妙樂に於ても鮮かに表れ、即ちまづ天台が釋涌出品に於て、

虛空湛然、無レ早無レ晚、惑者執レ迹、而闇二其本一、召レ昔示レ今、破レ近顯レ遠、故言二從地涌出品一

といふ遊心法界の透徹せる圓解を示せるに對し、湛然は更に之を明かにして、

虛空理也、本迹事也、事有二本迹一、理無二早晚一、惑者迷レ理、而闇二本迹一、故執二近迹一、以失二遠本一、本迹尙迷、況不思議一[88]

88　同廿五2 3

と、即ち遂に事の人格における極果の佛陀の本迹古今の論を去つて、久空今空下空上空、則體一なる、所謂第一義空と稱せらるゝ實相唯理の超時間界に超登することを以て、極意とたしたのである。たゞこの點に於ては台荊の妙解深釋眞に吾人をして屢々案を扣いて擊節讃歎せしむるものがあるのであるが、然しかくして此經も亦遂に欲二說二本有理妙常經一、或は說二本有理常妙經一、即ち本有とはいへ唯だ諸經通同の無相無形の無作の法性唯理の眞如界に融沒しはた還歸し去り、宇宙の實相・妙法の體玄義は畢竟して空の外なく、無の外なく、かくて一切經中唯一無二なる、かつ之無くんば佛敎あるべからざる所の法華壽量の經功としての、事の常住の眞意味、即ち一大有・一大本有・本有事妙常經はたまた本有事常妙經たるものとしての、本佛常住に對する有相信行といふ一大哲學は、遂に發揮さるゝ所なくして終つたのである。[89]

89　同六6

妙樂が同じくこの涌出品の記に於て、

方是毘盧遮那、身土之相、若云二塵刹重々相入、重々相有、重々事等、重々說等一、爲二未了者一、以レ事顯レ理、若不レ了二此一旨一、誰曉二十方法界、唯有二一佛一、亦許二他佛一、若許二他佛一、他亦身土、重々互現互入互融、當レ知祇是、約一論レ遍[90]

90　同廿五7

と、かの華嚴的思想を開顯して本佛論に肉薄せる解釋を示せるも、而もその唯有一佛といひ約一論遍といふ一とは——先にも聊か觸れたる如く——宗敎學上、否寧ろ實在の論理として、單一か擇一か唯一か統一か、相對一か絕對一か、根本一か完成一か、原始的太初一か究極的最高一か、個佛の一か本佛の一か、系列的一か多系列の一

完結か、遂に之を知るに由なくして終つた。予が、かの老莊の言とカントのテクニックとシユライエルマツヘルの思想とを藉り來つて、之を開顯的に隨義轉用し、以て、眞如は大一にして小一、所謂、至大無外、謂二之大一一、至小無内、謂二之小一一、否寧ろ quid juris として「零」、その零なるものが而も佛界「無限」の多を生み多を貫いて——所謂超個人的法身常住といふ理の根柢に立つて報應常住といふ事の個佛の無限連續を生み、かつその無限系列的多佛としての佛界を全體として貫き全體として統べて——遂に偉大なる quid facti としての、勿論純價値的實在たる quid facti としての、所謂 höherer Realismus としての、本佛の「大一」に至るといふ、「零と無限と一」とを以てする所の、實在に關する數理的論理の妙は、彼等には遂に見る由もない。

天台哲學におけるかくの如き理本事迹・法身爲本・實相無相・法勝人劣といふ法性至上論は、佛教思想、否一般に東洋文化の基礎的一面ではあるが、決してその全部ではない。茲には未だ眞に十全なる建設的實在論が示されてゐない、其に未だ到達せざるが故に、又其が含まれ示さるゝ由もない。宇宙間眞乎の絶對たり眞乎の實在たる宗教客體、而も遂に究極的意味に於て、偉大なる我が一念の己心の最後の内在たる超越的尊嚴の本佛、予の所謂「本有體系の第一寶」たる、卽ち日蓮聖人の教學における冲微の法門たる、「觀心本尊」といふ、實在論の祕奥かつ直ちに卽實踐門の端的なる、驚くべき一大宗教哲學における最後かつ最初の對象たる所のもの、眞に宇宙人生を貫いて苟くも宗教なるものの成立の quid juris プラス quid facti なる所のものは、未だ實に發見せられてゐない。現代哲學に於て、東洋の文化は無にありといはるゝが、宛も道生が法華經疏に於て、佛法、夫至像無形、至音無聲、希二微絶朕思之境、豈有二形言一哉といへるが如く、所謂形なき所に形を見、聲なき所に聲を聞かんとするは、實在に對する深い思想であつて、それは確かに東洋文化の根柢的方面を見たものである。しかしその歸結ではなく全部ではない。而してその無とは實に眞如法性を意味するものであり、勿論古代よりも一層深い論理的構造の精緻を示せる部面も含まれてはをり、かつ更に西洋文化を攝取して科學成立のアプリオリを示しつゝ哲學の領域に突き進み、そこに更に所謂歴史的世

界を論ずるものでもあるから、古今決して單純に一ではなく、又その論理的組織や表現の異れることはいふまでもないが、然しながらその根本的に脈絡相通ずる一系の思想、卽ち所謂その根柢に流るゝ所の思想として、かくの如き無の思想・空の諦觀・般若の認識、所謂智度無極といひ明度無極といひ開覺自性といふ如き般若波羅蜜として、無作・無生の實在の自覺に徹し、所謂無生法忍といひ無生門の止觀といふ如き無生寂滅の實在界への反省と直觀に徹したる東洋文化の先哲は、印度には龍樹、支那には天台、而て後者は前者を發展せしめて中道三諦の妙觀に達したのではあるが、而もその歸結は遂に同じく空諦無相なる法性の理に歸したのである。茲に佛陀論上の、否寧ろ廣く一般的に、眞の意味に於て實在論上の、根本的不備あり。然も人心自然の要求、或は思想發展の必須的傾向は、遂に人格實在の絕對者たる佛陀卽ち眞の神そのものを求めずんば止まず、勿論其は單に人間感情の投影として佛陀とか慈悲とかいふ如き名の下に措定せらるゝといふ如き bodenlos の脆弱なる Schein-religion, Schatten-glaube, Wahnsinn であるべからざるは、いふまでもない、かくの如きは未だ根本的に元品の無明を破らざるの思想たるに過ぎぬ。然しながらその眞に徹底合理的にして而も無限に神祕なる絕對の眞實在者が容易に發見せられざるに及んで、茲に遂に、宛も無の Abfall が Naturalismus となるといはるゝ如く、日本中古における台東二密等の異端傍系的本覺思想を生んで、「無始久遠の自然覺」といふ如き因果無視・不修現前の素法身を擁しつゝ而も之を佛と名けんとする如き、一種の自然主義的・現實絕對肯定的・所謂絕對思想の絕對肯定的・但し惡しき意味の肯定たり且つ絕對其物の概念もなほ不充分なる、且つ宛もヘーゲルの汎價値的無價値・汎神論的無神論なる如き万有神論・宇宙神論的傾向に墮しゆき、而もその情勢を一層極端化するに至つたのである。現代の島地大等氏は其にも拘らずその本覺思想の魅力に引かれて此に心醉したる人である。さりながらその一源流は、實に天台智者その人の法身爲本・理本事迹といふ法性至上の唯理的實相論はたまた寧ろ佛陀論上の大いなる闇に由來するものなることを忘れてはならぬ。[91]

91　拙稿、「本佛實在の宗敎哲學」、廿六、統一、本年八月。同「本佛の救濟證系」一、佛性向覺と本佛統覺（天台及びカントの批判と開顯——綱要）前半、佛敎研究、本年秋季

號。同「觀心本尊の意味と構造」法華、本年十月以下。

さりながら龍樹の空は天台の實相となり、更にその意味を極めて日蓮の本佛となれるが如く、また龍樹の八不中道は天台の摩訶止觀となり、遂に極まつて日蓮の觀心本尊となれるが如く、そこに消極より積極へ、否定的より肯定的へ、所謂實在の程度ともいふべく、將又それに相應して價値の程度ともいふべき、眞實在の具體性への發展の跡を見ることができる。其が主觀的には人心自然の要求であり、客觀的には思想文化の趨勢であり、そこに所謂知識客觀性の發展が存するのであつて、卽ち眞理といひ實在といふものの內面的生命が眞に滿たされてゆくといふ深い意味が見られるのである。之を衆生に就ては、一相一味、所謂解脫相、離相、滅相、究竟至二、於一切種智一といひ、之を佛陀に就ても、如來是諸法之王、若有二所說一、皆不レ虛也、於二一切法一、以二智方便一而演二說之一、其所說法、皆悉到二於一切智地一といふは、此に於て寔にその眞なることを知る。如來は更に敎詔して曰く、

如來觀二知一、一切諸法之所二歸趣一、亦知二一切衆生、深心所行一、通達無碍、又於二諸法一、究盡明了、示二諸衆生、一切智慧一等云云。

本佛の哲學(完)

今や天台逝いて千三百五十遠忌を四年の後に迎へんとし、將又カント生誕二百二十年に當り、否實に我が本化別頭の法將日蓮大士六百六十二遠忌の今年に際り、夙にこの聖哲が「日は東より出でて西を照す、佛法必ず東土の日本より出づべき也」と豫言せしが如く、神の概念のコペルニクス的轉回、然り全く新たなる神の存在の證明が地に齎さるるに至つた。而も共は七百年の昔既に徹底透明の哲學的論理の下に、否、迫害慘憺たる護國殉敎の血涙史の裡に、赫々として顯示せられたるものであり乍ら、今正是共時を得て昭和聖世の大東亞戰下に燦然として輝き出づるに至つたのである。被天台は法華玄義に於て佛敎形而上學を說き、摩訶止觀に於て佛敎認識論を說いたが、共に未だ完成せず。カントはロックやヒュームの心理學的不純性を斥けて認識の quid juris と quid facti を明かにしたが、遂に物の世界・自然の世界に止まつて大いなる心の世界に入らず、形而上學の Disziplin に嗟嘆して遂にその Kanon を斷念した。確かに神の quid juris と quid facti といふ如きことは彼の到底夢想だもし得ざる所であつた。然るに今や日蓮の開目鈔は佛敎的理性批判の根據に立つて本佛實在といふ堂々たる形而上學を樹立するのみならず、更にその最後の認識論的根據を尋ねて遂に觀心本尊の堂奧に達し、同時に實踐の祕門を開いて以て、一大理性體系を建築するに至つたのである。世界秩序と人類文化の新たなる黎明は實に此の處よりして輝き出づるであらう。予は更に是を論明せねばならぬ。